



Title	Association between interpregnancy interval and risk of preterm birth and its modification by folate intake: the Japan Environment and Children' s Study
Author(s)	谷川, 果菜美
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/87852
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論 文 内 容 の 要 旨
Synopsis of Thesis

氏 名 Name	谷川 果菜美
論文題名 Title	Association between interpregnancy interval and risk of preterm birth and its modification by folate intake: the Japan Environment and Children's Study (妊娠間隔と早産との関連について)
論文内容の要旨 〔目的 (Purpose)〕 妊娠間隔(子どもの出生から次の受胎までの期間)と早産との関連及び食事やサプリメントからの葉酸摂取による関連の修飾効果について明らかにすることを目的とした。 〔方法 (Methods)〕 エコチル調査に登録された103,062の妊娠のうち、単胎生産児55,203人を対象とし、妊娠間隔と早産(在胎週数37週未満)との関連を分析した。兄弟の生年月、エコチル調査対象児の生年月及び在胎週数を用い、妊娠間隔を算出した。早産は在胎週数37週未満と定義した。兄弟の生年月は妊娠初期の自己記入式質問票の情報、エコチル調査対象児の生年月及び在胎週数はカルテの転記情報を使用した。また、食事及びサプリメントからの葉酸摂取は、十分な葉酸摂取の群(食事摂取: 400 µg/日以上 もしくは 毎日のサプリメント摂取: あり)と不十分な葉酸摂取の群(食事摂取: 400 µg/日未満 及び 毎日のサプリメント摂取: なし)の2群に分類した。食事からの葉酸摂取は妊娠中後期の食物摂取頻度調査(FFQ)、サプリメントからの葉酸摂取は妊娠中後期の自己記入式質問票及び食物摂取頻度調査より情報を得た。ロジスティック回帰分析を行い、母親の年齢及び共変量を調整した上で、妊娠間隔による早産のオッズ比及び95%信頼区間を算出した。 〔成績 (Results)〕 単胎生産児55,203人のうち、早産児は2,615人(在胎週数22~33週: 521人、在胎週数34~36週: 2,094人)であった。妊娠間隔18~23か月と比較して、6か月未満と120か月以上の妊娠間隔において、早産が多かった(多変量調整オッズ比(95%信頼区間): 6か月未満 1.63(1.30-2.04)、120か月以上 1.41(1.11-1.79))。また、6か月未満と120か月以上の妊娠間隔における早産リスクが不十分な葉酸摂取の群で高かった(多変量調整オッズ比(95%信頼区間): 6か月未満 1.76(1.35-2.29)、120か月以上 1.65(1.24-2.19))。 〔総括 (Conclusion)〕 日本において、18~23か月の妊娠間隔と比較して、6か月未満及び120か月以上の妊娠間隔は、早産リスクの増加と関連した。6か月未満及び120か月以上の妊娠間隔での早産リスクの増加は、不十分な葉酸摂取の群においてのみ認められた。妊娠中の十分な葉酸摂取は、妊娠間隔に関連した早産リスクを低下させる可能性が示された。	

論文審査の結果の要旨及び担当者

(申請者氏名)					谷川 果菜美	
論文審査担当者	(職)		氏		名	
	主査	大阪大学教授	磯 博 康		学 名	
	副査	大阪大学教授	榎江 友子		学 名	
	副査	大阪大学教授	大 園 恵一		学 名	
論文審査の結果の要旨						
妊娠間隔(子どもの出生から次の受胎までの期間)と早産との関連及び食事やサプリメントからの葉酸摂取による関連の修飾効果について明らかにすることを目的とした。 エコチル調査に登録された103,062の妊娠のうち、単胎生産児55,203人を対象とし、妊娠間隔と早産(在胎週数37週未満)との関連を分析した。兄弟の生年月、エコチル調査対象児の生年月及び在胎週数を用い、妊娠間隔を算出した。早産は在胎週数37週未満と定義した。ロジスティック回帰分析を行い、母親の年齢及び共変量を調整した上で、妊娠間隔による早産のオッズ比及び95%信頼区間を算出した。 その結果、妊娠間隔18～23か月と比較して、6か月未満と120か月以上の妊娠間隔において、早産が多かった(多変量調整オッズ比(95%信頼区間): 6か月未満 1.63(1.30-2.04)、120か月以上 1.41(1.11-1.79))。また、6か月未満と120か月以上の妊娠間隔における早産リスクが不十分な葉酸摂取の群で高いことが明らかになった。(多変量調整オッズ比(95%信頼区間): 6か月未満 1.76(1.35-2.29)、120か月以上 1.65(1.24-2.19))。 以上より、博士(医学)の学位授与に値する。						